



め～めめめめめ

目目目目目

目目目目目目目

目目目目目

うた の つもり です。

あ、5-7-5 なので。

意味はね、

めがいっぱい。

めーめめめめで、「め」に囲まれる。

あなたは監視される。

見えないめから。

しゃかいのあらゆる要素から監視をされます。

いや、だからって、

なんてことないんですけどね。

だって、そうでしょう。

暗黙の監視なんか、いつものことじゃん。

疲れると

つかれたら
めーめめめめめ
目がいっぱい。

仰向けになって見上げると
ほら、目がうえからぼくのことをみおろしている！
違います。
見下されてます。
あなた。

「その程度で疲れるのか？」

「働け」

「はたらけ！」

「はたらけ！」

もっとより良いサービスを社会に対して提供しなさい！
ですね。
分かりやすく言うと。

「バカにされてますよ？いいんですか？うふふ。」
口を持たない目がしゃべる、げんちょう。幻聴。幻聴。
目目目目幻聴。

ウフフフフフフフ

フフフフフ

ウフフフフフフ

ウフフフフ

目がいっぱい

目がいっぱいいっぱいいっぱい

誰からも見られていない思い込み

ウフフフフ

笑われている

ウフフフフ

監視の目に笑われている

小ばかにされている。

それが、あなた。

嘲笑される事で、嘲笑する側の人間を満たす

あなたは「おもちゃ」なんです。

気がつかなかったでしょう。

社会で働きバチのように働き、学校に一生懸命通い、色々と貢献したつもりになり、

私は誰からも認められている

または

認められていないけれど、私は認められるべきだ

そう思っている

その、思いを、小ばかにする

社会、という、目、目、目目目目目。

人を笑い、オモチャにし、嘲笑される。ばかにされる。

そこで、ふと、真面目になってみましょう。

なぜだと、思いますか。

じゃあ逆に、何故、生きていますか。
明確な目的を持っていますか。
意義はありますか。
ハッキリいえますか。人前で。
胸を張れますか。
馬鹿にされても、怒らないでいられますか？

嘲笑されるのが、イヤですか？
イヤなのはどうしてですか。
自信が無いからじゃないですか。

もっと、落ちなさい。
どんどん落ちなさい。

たくさん、たあくさんの
目目目目目にかこまれながら
まーっさかさまに、しゃかいの奈落へ落ちていきなさい。

自分を自由だと妄想したあなたを
世間は嘲笑するのが、だあいすき。
とっても とっても だあいすきよ。

フフフフフ

ウフフフフフ

ウフフフフ

楽しいね ～楽園～

快樂の
楽園

快樂は、実はくさり。ひとといういぬをつなぐくさり。

「気持ちがいいだろう！吠えろ！」

「ワンと鳴け、ご主人様に甘えろ！」

ひとがひとという犬畜生を飼うくさり。

いぬがいぬを飼っているのに

かたほうがいぬで

かたほうがひと。

あなたが自由だと思うならば

あなたの周りを見てごらんなさい。

人が作り出したものばかりでしょう。

人が人を、快樂でコントロールするために

作り出したモノにかこまれて

「わ た し は じ ゆ う だ」

作り物の自由という首輪につながれて

ワンワンワンワン、吠えるかわいそうな わんちゃん

あ な た。

野生を失い、気高さを失い、

飼い飼われる存在へと墮したあなたよ。

忘れたか。

ゆたかさを。

生まれたときに、全て手にしたものを、

得るごとにうしない

得るごとにうしない。

おおきくなるごとに
欲望の両の手は
だんだん だんだんと
おおきく なっていく。

そのりょうの ひとみは
禽獣の如く対象をとらえ
より高度な快楽を貪り食らわんとす。

あわれなる はだかのけものは
あわれなり 何も持たないものを
絶望のドレスで、その身を着飾り
刹那の快楽を、高尚と名づけ

人間社会の、きちがいどもは
大人の舞台上、狂喜乱舞する。

目目目目目

「生存権」

目目目目目

「基本的人権」

目目目目目

「幸福追求権」

目目目目目

「これ以上ここに書くのがめんどくさくなるぐらい、星の数のような権利」

権利を主張するおとなたちの
利権をむさぼる、きちがいの目目目目目が
これ以上ここに書かなくても、
十分なぐらい理解できるほどに、
権利権利権利権利権利！が
じゅうじゅうじゅう自由自由自由！で
快楽かいらく快楽かいらくかいらく！が

あんもくのうちに 隣の人のかぶりを シメている。

金を取るのは、死ぬほどの病だと、昔の人は言った。

死ぬほどの病のような欲望が、社会に渦巻いている。

手をよおく見てごらん

二つのテは

ふたつとも

あなたの首のところにある。

何をするか知っているのかい？

自分の首をしめているんだよ。

欲望という名の両の手が、

自分の首を、しめているんだよ。

視線

街を歩くと人と視線がすれ違う。

ぼくの存在が無かった事にされる。

ここに、いるのに。

いない？

いや、いる。

いる？のに、どうでもいいや。

私の目は

二つあるのに

どうして二つあるのに

もっと沢山の目が要るんだろう。

どうして人は二つの目だけじゃ飽き足らず

もっと多くの目で

人を監視したがるのだろう。

暗黙に。

何も言わずとも。

ふたつのまなこでさえ

ちゃんとまっすぐを、見る事が出来ないのに。

欲望という名の

無数のまなこは

いったいいくつのものを

ちゃんとまっすぐに

見る事が出来るんだろう。

「め」 目目目目目 (め～めめめめめ)

<http://p.booklog.jp/book/26658>

著者：せいうんですよ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/seiundesuyo/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26658>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26658>